

ドラキュラくん

木原美香子・天野真樹人（共著）

トランシルバニアの森の果て、岩山のとっぺんに古いお城がありました。

西の塔の小さな部屋でドラキュラ坊やが目覚めました。城の中はひっそりとしています。パパやママ達はまだぐっすりと眠っているのです。おなかのすいたドラキュラくんはキッチンにおりていきフリーザーの中をのぞいてみました。そこにはあいかわずいろいろな血がおいてあるだけです。

「アア、イヤになっちゃう。ママ達は偏食で困るヨ」

ドラキュラ坊やはため息をつきました。実はドラキュラくんは血なんかまっぴらさという、一族きつての変わり者だったのです。毎朝小鳥の声とともに起きて城の屋上で日光浴をしますから、肌は青ざめているどころか地中海の漁師の子のように小麦色をしていました。

ドラキュラは日の光に弱いですって、あれは夜中中起きているから朝起きられない、夜型のご先祖様の苦しい言い訳なのです。ドラキュラくんは食べ物

だって好き嫌いせずに、なんでも食べました。これはママ達には秘密なのですが、ドラキュラくんは村の郵便局止めで通信販売の健康食品を買っていたのです。

村におりて行く時は、Tシャツとジーンズに着がえてナイキのバスケットシューズまで履いていきます。ですから誰にもあやされません。唯一のなやみは二本のキバでした。

ある日ドラキュラくんは一大決心をして歯医者へ行くことにしました。キバを抜いてもらうのです。歯医者は少し離れた町にあります。ドラキュラくんは朝一番のバスに乗り、町へでかけて行きました。町へ来たのは初めてです。車や人の多いこと、高い建物にはびっくりしました。最初はどちらへ行っているかわからず、キョロキョロとあたりを見回していましたが、良く見ると町ってなかなかおもしろそうではありませんか。急ぎ足でビルに吸い込まれていく大人たち。そうかと思えば重いカバンを持って

スクールバスに乗り込む子どもたちもいます。顔色は皆ドラキュラくんよりずっと青くて元気がありません。新聞売りは声高に叫んでいますし、車のクラクションやエンジンの音はひっきりなしです。

しばらくのあいだドラキュラくんは好奇心一杯の目をまんまるくして、町のようすを眺めていましたが、そのうち暇そうに猫にえさをやっているおばあさんを見つけました。そこでとてもしないにおじぎをしてききました。

「おばあさん、ちょっとおたずねしますが歯医者さんはどこでしょうか」

おばあさんは眼鏡をかけなおすとドラキュラくんをじっと見て言いました。

「あらまア、なんてお行儀の良い坊やでしょう。近ごろトンと見かけなくなったタイプだわねえ。坊やどこから来たの？フーン村からなの、それじゃ迷子になったら大変、よく聞いてね。歯医者さんならまずこの先を左に曲がって3つ目の信号を右に曲がった、角から2軒目のビルの1階にあるゴンザレ

ス先生がとても上手よ。少しお年を召しているけれど親切でちっとも怖くないの」

ドラキュラくんはていねいにお礼を言うと

「えーと、えーと、ゴンザレス、ゴンザレス」と言いながらおばあさんに教えられたとおりに歩いて行きました。

「ゴンザレス、ゴンザレス、ドンザレス、あれ違ったドンジャラス、いやドンジャラホイ、ドンジャラホイせんせーい！」

ドアがあいて白衣を着た小さなおじいさんが出てきました。

「わしの名はゴンザレスじゃよ、どうした坊や」

「アノー、ボク、、、歯を抜いて欲しいんです、、、」

「どれどれ、オオ！きれいな歯をしているじゃないか、どの歯がいたいのかね？」

「エート、痛いんじゃないくて、このキバみたいなのを抜いて欲しいんです。これがあると皆にドラキュラみたいとからかわれるんです」

ドラキュラくんはそっと先生の顔を見上げました。

「ホホウ、ナルホド、キバみたいじゃ。これでは困るだろうナ、よしよしわしにまかせなさい。ハイその椅子にすわって」

先生はやさしくドラキュラくんを椅子に座らせました。そして体の後ろに注射器をかくすと

「ところでなぞなぞを一つだすよ、答えられるかな？」と言いました。

初めて歯医者に来たドラキュラくんは不思議とも思わず、

「僕なぞなぞ大好き！！」と答えました。

「それでは上から読んでも、下から読んでも同じで、真っ赤な洋服に緑の帽子をかぶっているものはな~んだ？」と先生がニッコリしてききます。

「エート、エート、エート、、、アッそうだと・マ・アーッ！」

ゴンザレス先生はドラキュラくんが大きな口をあけてトマトのマを言ったとき、すかさずチクンと注射をしたのです。

「アーンアーン、ひどいよ先生」

「ゴメン、ゴメン、子どもたちは注射がきらいで口をあけてくれないからの、これはわしの秘密の奥の手なんじゃよ」

さて無事にキバを抜いたドラキュラくんはごきげんでした。

帰り道村の中をあっちへブラブラこっちへブラブラしているうちに、お百姓さんの畑で真っ赤なトマトを見つけました。

「カプッ、おいしい！！」

ドラキュラくんはしたたりおちるトマトの汁をペロペロなめながら思いました。

「そうだ、これをしばってジュースにしてフリーザーに入れておこう。そしたら朝ビタミンたっぷりのトマトジュースが飲めるぞ」

そこで3つ4つトマトをもぎとると、お城へ一目散に駆け出しました。

キッチンでトマトをしばり、パックに入れてフリー

ジングしたドラキュラくんは、さすがに昼の疲れがでて眠くなりました。塔のへやへ戻り、ドラキュラくんが眠りにおちる頃城の中がざわざわとにぎやかになってきました。ドラキュラくんのパパやママをはじめ、大おじいちゃま、大おばあちゃま、おじいちゃまにおばあちゃま、おばさま、おじさま、いとはここにはとこ、、、！！ドラキュラ一家は不死の命を持っているため、一族が増えて増えて夜のお城はラッシュアワーの駅のようなようでした。

「アラ、また寝ているんだわあの子。ほんとにしようがない子」

ママが言いました。

「ほんとに変わった子だよ」

おばあちゃまもうなずきます。その時キッチンから「ウォーッ」という叫び声が聞こえました。あわててかけつけるとドラキュラくんのいところが、幽霊でも見たような顔をして、ドアのあいたフリーザーを指差しています。そこには何と、ドラキュラくんのしばったトマトジュースが血液のパックに混ざっ

て置いてあるではありませんか。

「こんな恐ろしいもの、一体誰が？間違っただりしたら大変な事になるところだった」

ドラキュラくんのパパが青ざめた顔をもっと青くして言いました。「本当にだれが」と言いかけてママはハッとしました。

「あの子だわ、こんなことをするのはあの子しかいません」

そこで一族は西の塔の階段をドヤドヤとかけのぼり、グッスリ眠っていたドラキュラくんをたたき起こしました。ドラキュラくんおしりをペンペンされ、たっぷり叱られました。おまけに日にやけた肌と、キバの無い口元も見つかってしまいました。

「なんという不良少年になってしまったの、私はおまえをこんな風に育てた覚えはないわ」

とうとうママは泣き崩れてしまいました。大人たちによってたかって叱られたドラキュラくんは、うんざりして言いました。

「ママやパパたちのほうがずっと変だよ、みんな

朝はちゃんと起きて夜中は眠っているし、村でも町でも大人は一生懸命働いているよ。血なんか吸うのは虫くらいのもんさ。僕は不良じゃない。こんなところ出て行ってやる。僕はきっと成功してみせる。そしたらママやパパたちは深夜放送のテレビで僕をみることになるよ」

大人たちはポカンとして突っ立っていました。ドラキュラくんの言ってることがぜんぜんわからなかったからです。何百年も前から朝になると眠り、夜中に起き出して血を求めてさまようものだと、教えられたとおりにやってきた大人たちはドラキュラくんの事を、まるでエイリアンをみるような目でみつめていました。

ドラキュラくんは朝になるとトランクに荷物を詰め、広い広い世界に飛び出しました。そして持ち前の身の軽さでスポーツ界のヒーローになっていったのです。

バスケットのプロ選手となったドラキュラくんの
ドラキュラ君-5-

試合は衛星放送で全世界に流されます。ドラキュラ城でも、衛星放送のアンテナをたてテレビを取り付けました。ドラキュラくんの試合が始まると、城中の皆がテレビの前に詰めかけ声援をおくります。変わり者とはいえなんといっても身内なんですから。そしてドラキュラくんがファインプレーをすると、パパやママはほこらしげに手をたたくのでした。ドラキュラくんは時々カメラにむかってVサインを送ります。それは遠くはなれたトランシルバニアのママたちに送られるものなのです。そしてドラキュラくんの得意そうな笑顔はこう言っているのです。

「どんなもんだい！僕を見直したかい？」
ってネ！！